

日本庭園はトンボのオアシス

～ 白鳥庭園と徳川園に生息するトンボ ～

白鳥庭園と徳川園は市街地に造成された日本庭園で、水景施設管理の一環として水面清掃・池清掃が定期的に行われ、水生植物の生育が安定した状態で維持されています。園内を流れる水は、ろ過循環式に加えて豊富な工業用水や地下水を補給しており、良好な水質を保持しています。

白鳥庭園のトンボ確認種は 21 種、徳川園のトンボ確認種は 20 種で、鶴舞公園や呼続公園とほぼ同レベルのトンボが生息しており、発生数も安定しています。このように、**市街地にある日本庭園は、都市における安定したトンボの発生地**として機能しています。



白鳥庭園

築山から流れる溪流を模した流水を起点に、清羽亭付近の緩流域、上の池・中の池・下の池の池沼など多様な水辺環境を有している。下の池や清羽亭付近の水域は、浮葉植物や抽水植物が豊富で、トンボの生息にとって良好な環境を呈している。

これまで確認したトンボは 21 種で、アオモンイトトンボ、クロイトトンボ、ギンヤンマ、チョウトンボ、シオカラトンボ、コシアキトンボなどトンボの個体数も多い。



徳川園

大曾根の瀧から流れる溪流を模した流水を起点に、溪流の池（中溜り）、龍仙湖、西湖堤東の池、菖蒲田など多様な水辺環境を有している。西湖堤東の池は浮葉植物が多く生育しており、トンボの生息にとって良好な環境を呈している。

これまで確認したトンボは 20 種で、モノサシトンボ、セスジイトトンボなど都市部では生息地に限られる種も確認されている。

日本庭園は、なぜトンボのオアシスなのか？

白鳥庭園と徳川園は、市街地にありながら多くの種類のトンボが生息しています。その理由を水域環境から考えてみます。

理由1：水がきれいな状態で安定している



白鳥庭園と徳川園の水

池泉回遊式の日本庭園である白鳥庭園と徳川園は、水を循環させて水域景観を形成している。ろ過循環式に加えて豊富な工業用水や地下水を補給しており、良好な水質を保持している。

そのため、トンボの生息に重要な要素である水質が安定的に、良好な状態で維持されている。

他の市街地公園と比較すると……



水が汚れている中村公園(中村区)と道徳公園(南区)の池
水は黄緑色を呈しており、富栄養化が進んだ状態と思われる。



水が濁った呼続公園曾池(南区)

呼続公園曾池は浮葉植物や沈水植物が豊富でトンボが多い池である。
2018年には池の水が濁り、トンボの数も減少した。

理由2：水域の植生が多様で、安定している



白鳥庭園 下の池



白鳥庭園 清羽亭西



徳川園 西湖堤東



クロイトトンボ産卵



アオモンイトトンボ交尾



クロスジギンヤンマ産卵



ギンヤンマ産卵

白鳥庭園・徳川園の水域に生育する水生植物

白鳥庭園の下の池（左写真）や清羽亭西（中写真）には浮葉植物や抽水植物が生育し、イトトンボ類、ギンヤンマ、チョウトンボなどの産卵場所、羽化場所となっている。

徳川園の西湖堤東の池（右写真）は浮葉植物が生育し、イトトンボ類の産卵場所となっている。

他の市街地公園と比較すると……



大江川緑地



中村公園

水面に水生植物が生育していない大江川緑地（南区）と中村公園（中村区）の池



蛇池（HPより）



蛇池（2018.7）

水生植物が消失した蛇池（西区）

HP 写真（左写真）では水生植物が生育していたが、2018年（右写真）に当地を訪れた時は、水生植物の生育はほとんどなかった。

理由3：水域を取り囲むように樹林が分布する



白鳥庭園 下の池



徳川園 溪流の中溜り

樹林に囲まれた白鳥庭園と徳川園の水域

白鳥庭園の下の池（左）と徳川園の溪流中溜り（右）は、水面を囲むように樹林地が分布し、トンボにとって良好な生息空間を形成している。羽化した未熟なトンボは、成熟するまで水面に連続する草地や樹林地を利用し、成熟後も、水面に張り出した樹木を交尾や休息、止まりの場として利用する。またオオアイトトンボは、水面に張り出した樹木の枝などを産卵の場として利用する。（P.11 参照）

他の市街地公園と比較すると……



中村公園



道徳公園



鶴舞公園



呼続公園

池の周囲に植栽樹を配置：中村公園(中村区)と道徳公園(南区)の池
樹木の密度は疎な感じで、樹林が有するワイルドさはない。

池の水面に連続する樹林：鶴舞公園(昭和区)と呼続公園(南区)の池
水面に連続して樹林があると、トンボの数も多くなる。